今年は鶴彬（つるあきら）没後85年

第11回 鶴彬のふるさと「高松歴史街道フェスティバル」

佐高 信さん 講演決定！

演題「時代を撃つ川柳人 鶴彬」

事前に参加協力券をお求め下さい。（500円）

9月3日（日）

かほく市高松
産業文化センター
◆講演＆座談会
・講演 午後1時30分～3時
・座談会 午後3時10分～4時

異色で多彩な評論家。著書多数。「会社栄えて社員なお貧し」と大企業を筆刀両断。時代と格闘した人々を描いた評伝多数。

佐高信氏の新書
『反戦川柳人 鶴彬の獄死』
集英社新書 ¥1078.-

2023年9月

会場／高松産業文化センター大ホール（かほく市）

●1日（金）午後2時～5時
2日（土）午前10時～午後5時
第10回記念「鶴彬」かほく市民川柳祭 作品展示・授賞式
第28回鶴彬川柳大賞 作品展示
●3日（日）佐高信さん講演会
講演 午後1時30分／座談会 午後3時10分より
●14日（木）【鶴彬の命日】
午前10時 第6回「墓前法要の集い」（浄専寺）
午前11時 第25回鶴彬をたたえる集い「碑前祭」（歴史公園）

特別展／彫刻と墨書作品展

香川県の 大西康彦氏・樋笠幸三氏

書「哭」

作品「鶴彬」

丸亀市で開催の二人展→
大西康彦（彫刻 左）・樋笠幸三（書 右）

鶴彬通信
はばたき
「鶴彬を顕彰する会」
http://tsuruakira.jp/

第43号
2023年５月30日
鶴彬を顕彰する会

もくじ

②～③面 総会のご報告
④～⑤面 二つの川柳大会のご案内
⑥～⑨面 『反戦川柳人 鶴彬』を読んで 寺内徹乗
⑩～⑪面 読書リレー 武田裕一
⑫～⑬面 秋山清による鶴彬の紹介 渡辺寛
⑭面 こどものこころ五・七・五 年間賞 宇部功
⑮面 鶴彬・交流の広場 ⑯面 フェスタの日程 編集後記

第24回 鶴彬を顕彰する会総会

総会は、令和５（２０２３）年一月二十二日、まちかど交流館一階で開催し、十一名が参加しました。まず平野喜之事務局長が開会のあいさつ、議長に遠田勝良事務局を選任し、続いて板坂洋介副会長の挨拶がありました。議事に入り、事務局長から令和４（２０２２）年度の事業報告がありました。

令和４（２０２２）年度の事業報告

１．第23回総会

４月17日（日）午後１時30分よりまちかど交流館３階会議室で開催、前年度の事業、決算報告があり、22年度事業計画、予算を協議承認しました。

２．第24回鶴彬をたたえる集い

（はばたき42号に記載）

①第5回鶴彬墓碑法要の集い

９月14日（水）約20名の参加がありました。読経の中で参加者たちが焼香を行い、続いて平野喜之住職による感話がありました。

②第24回鶴彬をたたえる集い

墓碑法要の後、場所を高松歴史公園に移して、句碑前において開催しました。参加者は約20名でした。司会は幹事の高橋成典さんで、先ず金田平夫会長の挨拶があり、親族を代表して鶴彬甥の喜多義教さんが挨拶されました。かほく市油野和一郎市長からのメッセージが幹事の遠田勝良さんより代読され、盛岡と大阪の仲間からも連帯のメッセージが寄せられました。続いて、遠田さんから第27回鶴彬川柳大賞の選考結果についての発表があり、高松吟詠会代表の浜谷義則氏が鶴彬の川柳を吟詠、最後に参加者全員による句碑献花があり、参加者全員の記念写真撮影を終え散会しました。

③川崎裕長作品展

虫、鳥、動物を句に詠んだ鶴彬の川柳の中から、川崎裕長さんが自ら選んだ11句11枚の絵の展示が17日から19日まで高松産業文化センター大ホールにて行われた。初日の午後から川崎さんも親せきの方々を伴い来場されました。会場は市民川柳の入選者発表と18日には表彰状および景品の引き渡しなどとも重なり大変賑わいました。

３．第27回鶴彬川柳大賞

（はばたき42号に記載）

かほく市川柳協会から引き継ぎ７年目となりました。「現代を鋭く風刺した、新しい感覚の川柳」を募集したところ183名（365句）の応募作品をいただきました。選者には、鶴彬を顕彰する活動にご協力いただいている６名の方々にお願い致しました。

４．普及活動

①鶴彬通信「はばたき」の発行は本年度３回発行を目標に、第40号／５月30日（２０２２年）・第41号／９月10日（２０２２年）・第42号／１月20日（２０２３年）に発行しました。鶴彬通信発行で、行事計画と経過報告を会員の皆様へお知らせすることが出来ました。また、ラインを使うことによって編集会議の日程もスムーズに決まるようになり、発行体制もある程度安定してきましたので、今後も企画と編集内容を充実し鶴彬を発信して行きます。

②２０２２年９月24日、喜多義教さん、小山広助さん、遠田勝良さん、渡辺寛さん、渡辺美智子さんと私の５人で盛岡に旅行しました。そして、佐藤岳俊先生や宇部功先生、鶴彬を語る盛岡の会の事務局長である浦川陽子さんと共に光照寺で鶴彬のお墓参りをしました。その後、喜多富美さんの御自宅にお伺いしてお話をお聞きしました。。渡辺寛さんは、高松出身の曽祖父が明治時代、北海道白老町に移住したことで、自分のルーツ探しに北海道に行くため美智子さんと車で盛岡まで行かれました。

続いて会計担当の小山広助事務局から令和４（２０２２）年度の財政報告、高橋茂典監査委員から令和４（２０２２）年度の会計監査報告がありました。

その後、事務局長が令和５（２０２３）年度の事業活動方針（案）について話しました。

令和５（２０２３）年度の事業計画

高松産業文化センターでの高松歴史街道フェスティバルの日程ですが、総会の時には９／16～９／18を予定していました。

しかし後で分かったことですが、その日程は他の団体によってすでに押さえられてしまっていました。

そしてまた、今年はフェスタの最終日に佐高信氏に講演していただくことに決まりましたので、日程を大幅に変更せざるを得ませんでした。

１．事業活動

第11回「鶴彬のふるさと・高松歴史街道フェスティバル」

■第10回記念「鶴彬」かほく市民川柳祭

■第28回鶴彬川柳大賞

会場／高松産業文化センターの大ホール

９月１日（金）午後２時～５時

９月２日（土）午前10時～午後５時

・入選作品を展示。

・表彰状は、市民川柳については９月２日に授与、川柳大賞については後日郵送。

・作品応募期間について

①第10回記念「鶴彬」かほく市民川柳

５月15日～６月30日

②第28回鶴彬川柳大賞

５月20日～７月20日

■講演会＆座談会

講師　佐高信氏

講題「時代を撃つ川柳人　鶴彬」

会場／高松産業文化センターの大ホール

９月３日（日）

・講演　午後１時30分～３時

・座談会　午後３時10分～４時

■第６回「墓碑法要の集い」

９月14日（木）

・開会・午前10時～閉式10時30分

・会場／浄専寺

■第25回鶴彬をたたえる集い　碑前祭

９月14日（木）

・開会・午前11時～閉会11時30分

・会場／歴史公園

２．普及活動

1．機関紙「鶴彬通信はばたき」・年３回発行〈予定・４月・８月・12月〉

2．資料室の充実

（開設・２０１４年９月14日）

①見学者の対応：動画を作成しＳＮＳで発信：短い紹介ビデオ制作しガイドに利用：句碑案内説明板

②展示企画：資料の整備と充実、新しいパネルの購入

③運営と物販：開館曜日（毎週 水・金・第１・第３日曜日）：時間・午後１時～５時：物販の整備・・

＊毎週火曜日は全館休館日：開室日時以外に見学を希望される方は事前に顕彰会事務局に連絡。

3．第38回国民文化祭（10月22日）

七尾市　全日本川柳協会・石川県川柳協会

4．七塚うみっこランドで鶴彬のパネル展

７月25日～８月10日

事務局長の事業活動方針の報告に続いて、令和５（２０２３）年度の財政予算（案）について会計担当の小山広助さんからお話がありました。

細川律子さんが、幹事を退任されることになりました。喜多義教さんが事務局に入られました。

二つの川柳大会成功の為に

一・第十回記念市民川柳祭

第十一回目となる「鶴彬のふるさと　歴史街道フェスティバル」が今年も開催されます。そのフェスタの中心的な催しが、かほく市内小中学生及び一般からの応募による市民川柳大会です。

残念ながらこの二年間はコロナの影響で思い切った企画が立てられませんでした。しかしここに来てようやくコロナも沈静化の兆しが見え始めています。

地道ながら続けて来た市民川柳祭は、くしくも今年で第十回目を迎えます。そこでこの川柳祭を「記念大会」と銘打って大いに盛り上げようと考えています。皆さんふるってご参加ください。（応募の詳細は下記）

二・第二十八回鶴彬没後八十五年川柳大賞

この大会は、わが郷土が生んだ川柳作家鶴彬の思いに共鳴して二十八年前から始められた全国の川柳人を対象にした大会です。

鶴彬が生きた時代に鶴が命を賭けて詠んだように、現代の我々が詠まなければならない川柳とは何か、川柳大賞は毎年その一点を念頭に選ばれています。

今年は鶴彬没後八十五年の節目。胸に突き刺さる句が例年にも増して寄せられるのを心よりお待ちしております。（詳細は下記）

第10回記念「鶴彬」かほく市民川柳祭 一般の部・小学生の部・中学生の部 作品募集

趣旨　今年も「鶴彬を顕彰する会」が第11回高松歴史街道フェスティバルの一環として広くかほく市民から川柳作品を募集します。

応募資格　かほく市民及びかほく市内に勤務する方。かほく市内の小学生と中学生、ただし小学生は四年生以上とします。

課題　「道」、投句は二句以内です。

応募方法　作品募集のチラシに応募用紙が掲載されています。個人の応募は封書で応募先へ。FAXでも受け付けます。小学生・中学生は、そこに作品、必要事項（学校名・学年）を記入し担任の先生に提出してください。

応募先　☎FAX　076-281-1201　〒929-1215　かほく市高松ウ57・かほく市川柳協会・小山広助　宛

応募期間　令和五年五月十五日（月）から六月三十日（金）まで。

選考　一般の部はかほく市川柳協会、小学生の部は高松川柳会・中学生の部は七塚川柳会が選考し決定します。

発表　九月一日（金）高松産業文化センター大ホールで発表、展示します。入賞・入選作品はフェスティバル会場に、鶴彬の句と共に行灯で展示します。

表彰　小・中学生の部とも、最優秀句一句、秀句三句、佳作五句、入選句二〇句、佳作までに賞状と副賞を授与します。表彰式は9月2日午後2時より

主催　鶴彬を顕彰する会　かほく市川柳協会

後援　かほく市教育委員会　石川県川柳協会　北陸中日新聞

第28回　鶴彬川柳大賞　川柳募集

自由と反戦を貫いた魂の川柳作家「鶴彬」。彼の思いを受け継ぐ川柳を全国から広く募集します。

作品内容　「現代を鋭く風刺した、新しい感覚の川柳」

選者　赤池　加久（石川県川柳協会　会長）
岩佐ダン吉（大阪　あかつき川柳会会長）
植竹　団扇（東京　川柳成増吟社会長）
佐藤　岳俊（岩手県川柳連盟顧問）

高鶴　礼子（埼玉「ノエマ・ノエシス」主催）
遠田亀公子（石川　かほく市川柳協会幹事）

応募規定

1　自作の未発表作品に限ります。応募資格は問いません。

2　応募用紙は自由、楷書で明確にお書きください。応募点数は一人二句以内とします。

3　二重投句、また投句後の作品の訂正、差し替えはできません。また、同一作品、酷似作品が先行して発表していた場合は、入選・入賞を辞退していただきます。

4　氏名、住所、性別、電話番号を明記してください。雅号の場合は本人名を併記。

5　作品の返却はしません。

＊入賞作品の使用権は主催者に帰属するものとします。

投句料　一人金1、000円

＊代金は小為替で（切手不可）作品に同封してください。

応募期間　2023年5月20日（土）～7月20日（木）当日消印有効

選考方法　各選者の持ち点数を加算した総合計点により順位を決定します。

賞表彰

1　鶴彬大賞（1句）・表彰状＋1万円相当の、かほく市特産品を贈呈。

2　優秀賞（3句）・表彰状＋5千円相当の、かほく市特産品を贈呈。

3　佳作賞（5句）・3千円相当の、かほく市特産品を贈呈。

4　入選賞（若干）・記念品を贈呈。

発表　9月1日（金）「第11回鶴彬フェスティバル」会場で発表。
投句者全員に、後日入賞、入選作品の発表誌を送付いたします。

応募先　〒929-1215 石川県かほく市高松ク42番地　かほく市高松公民館・第28回「鶴彬川柳大賞」公募係 宛

問合せ先　かほく市川柳協会
事務局　小山広助 気付
☎／FAX　076-281-1201
携帯　090-4323-1754
E-mail : turuakira@yahoo.co.jp

主催　鶴彬を顕彰する会
かほく市川柳協会

後援　かほく市教育委員会
かほく市文化協会
（一社）全日本川柳協会
石川県川柳協会・和川柳社
北陸中日新聞

乱 鬼龍（東京）さんから
「鶴彬顕彰碑建設」の嬉しいおたより

「東京に鶴彬の句碑を！」と発足した「東京鶴彬顕彰会」は、この間建立の運動が諸事情の中、うまく進んで来なかったが、7月16日（日）、佐高信さんの【記念講演＋映画『鶴彬心の軌跡』（神山征二郎監督）上映】という企画で、新たなる思いを固めたいと、準備を進めています。

・会場　文京シビックセンター（会議室）
（JR水道橋、地下鉄春日駅下車）
・時間　午後1時開場
・講演　佐高　信さん
・映画上映『鶴彬―こころの軌跡』

多くの皆さんのご参集を呼びかけます。

なお、レイバーネット川柳班が5月31日開催した佐高信さんのネット実況した講演会の様子は、YouTubeでも閲覧ができます。ぜひ検索してご覧ください。（乱 鬼龍「東京鶴彬顕彰会」）

『反戦川柳人 鶴彬』を読んで

寺内　徹乗

私ごとになるが、私は広島旅行の少し前に、佐高信さんの著書『反戦川柳人　鶴彬の獄死』を入手し、広島に向かう列車の中や待ち時間、そしてホテルでこの本を読んでいた。私は、医療機関に勤めているので、新型コロナを持ち込むリスクを減らすため、長い間旅行は自粛しなければいけなかった。そして久しぶりの家族旅行に、私は広島を選んだ。それは、子どもたちにも戦争と平和について考えてもらいたかったからだ。子どもたちは、これから父親にどんな恐ろしい場所に連れていかれるかも知らず、旅行前からワクワクしていた。

広島平和記念資料館には、平日にもかかわらず長蛇の列ができていた。半分以上は外国人だった。中学一年の長男と小学五年の長女は、資料館の中の写真や遺品や解説などを、真剣に見ていた。だが、小学二年の次女は顔を上げず、母親の腕にぎゅっとしがみつき、「早く出ようよ」と言わんばかりに母親の体をぐっと押していた。資料館を出て子どもたち三人は「地獄から天国や」と安堵のため息をついていた。あとで長女は私に言った。

「うちらが『戦争はダメだ』と言っても、みんなが『戦争をしたい』と言ったら意味ない」

確かに、長女の言う通りだ。だから、みんなが戦争はダメだと思うにはどうすればよいかということを。私たちは本気で考えなければならないのだ。

資料館から眺める平和公園と原爆ドームは圧巻である。広島と長崎に落とされた原子爆弾は、第二次世界大戦の終結の象徴であり、原爆ドームは戦争の行きつく先の象徴でもある。公園にあるアーチ型の原爆死没者慰霊碑には、原爆ドームを覗くことができ、その碑文には「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と刻まれている。この慰霊碑の前に日本人だけではなく世界中の人々も立ち止まり、記念撮影をしたり、黙祷したりする人たちの列ができている。

だが、この「過ちは繰返しませぬから」という言葉は、私たちの心に響いているか。この戦争の後も、世界のあちこちで戦争が起こっているではないか。そして、今なお核戦争の脅威にさらされているではないか。この碑文のある日本でさえ、特定秘密保護法や、集団的自衛権を解釈改憲でねじこんだ安保法制が、市民の反対デモの中、粛々と強行採決された。それを推し進めた安倍政権は倒れることはなく、その後四年以上も続いた。そして現在も、ここ広島から選出された岸田首相のもとでも、敵基地攻撃能力など含める「国家安全保障戦略」の改訂と防衛費の大幅増額の議論が、国民への説明もろくにしないまま、粛々と進められている。国民も、ウクライナ戦争や北朝鮮の脅威、中国の軍拡などを背景に「仕方がない」と受け入れてしまっているようにも見えるが、これらの大転換は憲法九条を骨抜きにするものだという専門家の指摘もある。鶴彬ならこの時代の流れに何と言ったであろう。私は、この本を読みながら、自問自答していた。

もし私たちが、あの戦争について深く学んでいれば、また違う選択肢が見えてくるのではないか。戦後生まれの私たちは、空襲、特攻、玉砕、沖縄の地上戦、原爆、戦後の満州についてなど、学校教育やテレビや映画などを通して、戦争の恐ろしさについては、知っているつもりだ。しかし、戦争が、いつ、どのように始まったのかと問われたとき、私たちは言葉に詰まってしまう。

日本がアメリカと戦争をしていたというイメージを持つ人は、「12月８日の真珠湾攻撃」で始まったと答えるかもしれない。しかし、それ以前に日本は中国と戦争をしていた。この戦争に勝つために、日本はアメリカやイギリスまで敵に回した。そもそも、中国との戦争は、日本の関東軍が満州事変を起こし、日本政府もこれに便乗し、武力で満州国という日本の傀儡国家を作ったことが原因で、中国人の反日感情を生んだ。それ以前には、日本は武力で韓国併合し、朝鮮人の恨みを買ってきた。それ以前に

も、日本は朝鮮半島の権益をめぐり、日清戦争・日露戦争をした。戦争の英雄を軍神としてまつり、日本は勝利に酔っていた。そして現人神である天皇を頂く日本は、戦争に負けないという自信をつけた。そう考えれば、あの昭和の大戦争に続く道は、この明治の二つの戦争から始まっていたという見方もできる。

明治政府は富国強兵と皇国教育を推し進め、天皇制ファシズムは次第に強化されていった。国家によるマインドコントロールを受けた当時の多くの日本人は、日本がアジアの国々を侵略していくことに疑問を抱かなかった。いざ戦争が始まれば、お互いを鼓舞しあい、監視しあっていた。庶民の苦しい生活を横目に、日本は日清戦争から太平洋戦争に至るまで、戦争に明け暮れていた。

もちろん、これに抗う者はいた。鶴彬もそうであるし、鶴彬が尊敬した石川啄木や、啄木が尊敬していた幸徳秋水などもその一人だ。しかし残念ながら彼らは少数派だった。そのため結局は、大多数の日本人は、現在から見れば誤っていた国策を信じ、破滅への戦争へと突き進んでいった。長女の言葉「みんなが『戦争をしたい』と言っていたら意味がない」状態になるのである。

今まさに、ロシアがそのような状態にある。戦争に反対するロシア人は、亡命したか、獄中にいる。心の中で戦争に反対しているロシア人は、自身や家族が強制的に戦地に駆り出されようと、身の安全を祈りながら、戦争が終わるまで沈黙するだろう。こうなる前に、プーチン政権を民主的な方法で終わらせることはできなかったのか。これは他人ごとではない。日本もロシアを他山の石とすべきではないか。

本の感想文としては、前置きは長くなってしまったが、この本は、鶴彬を紹介しただけの本にとどまらず、いろんな人物を紹介しながら、私たちに戦争や平和について深い洞察を与えてくれる本であった。特に鶴彬を論じた本として天皇制批判にまで切り込んでいるのは特に画期的であった。作家・城山三郎の小説『大義の末』の引用。

「天皇というものは、支配権力にとって実に便利な存在だからな。国民の総意を代表し、それを越えた存在ということにしておけば、たとえ自分たちが不都合なことをしても、天皇の意志だと責任を逃れられる。国民の批判を無視することができる。世論にすり代り、世論をおさえつける権威―天皇元首説がまた出てくる筈だ。しかも、憲法改正ということで再軍備と結びついて。……国防などと言ったって、結局、そのときの政治権力を守るだけ。国民は狩り出され殺される。そんなとき、一番適当な冠が天皇制だ。天皇という一語ですべてが正当化される」

「愛国心などと言い出す人を見ると、そんな人は戦争でただ得だけしてきた人じゃないかと、にくくてなりません。どれだけ兄のような犠牲を見れば気が済む人なのかと……。みんなが幸福にくらせる国をつくれば、黙っていたって愛国心は湧いてくるじゃありませんか」

おそらく鶴彬もこれに共感するのではないか。鶴彬が一九三一年に起こした赤化事件の軍法会議（軍事裁判）で、鶴彬が検察に述べた答弁が伝承されている。

「私の考えを簡単に申しますと、天皇の大御稜威を万民に及ぼすことであります。即ち文化を全国民が等しく享受出来るような国にすることであります。然るに之を途中に遮らむとする財閥軍閥を雲散霧消しようとするのが私の意見であります」

もちろん、前半の「天皇の大御稜威」についての部分は、無罪または減刑になるために方便だろう。井上剣花坊の王道主義を批判していることから考えれば、鶴彬の本音ではない。しかし、それ以外は本音だと思う。資産家・軍人・そして政治家などの一部の権力者が天皇制のもとに結託し、国民から搾取し、戦争を始め、国民を戦場に送り込み、国民が幸せになる権利を

奪っているのだと。

この『大義の末』に話を戻せば、これは一九五九年に初版されたものであった。「天皇元首」「憲法改正」「再軍備」「愛国」と、今から六十年以上の前の文章が、故安倍晋三元首相はじめ、保守派・タカ派とみなされている政治家が主張していることと同じではないか。

佐高さんは「城山と違って強制的に天皇制国家の大日本帝国の軍隊に放り込まれた鶴は、もっとストレートに天皇制への呪証を肥大化させただろう」と述べている。また、佐高信さんが、澤地久枝さんと対談した時のエピソードもこの本には紹介されている。

当時はまだ、故郷で鶴は知る人ぞ知る存在で「獄中死したアカ」という見られ方だった。

「それが今では町をあげて、郷土の誇るべき作家として扱われているのですから、すごいことよね」

と澤地は続けているが、それでも、「天皇制という臍」を除いた形で、鶴を顕彰してはならないだろう。それは鶴自身が望まないに違いない。天皇制（批判）にこだわり続けた城山をここで取り上げた理由である。

と述べている。確かに地元高松で鶴彬が評価されるようになったのが、ここ最近である。その一つは、一九九八年、澤地久枝さんが、一九七七年に出版した一叩人編『鶴彬全集』を改訂するにあたり高松にも訪れ、講演会をなさったことだ。もう一つは、二〇〇九年、神山征二郎監督の「鶴彬―こころの軌跡」の映画が作られたことだ。地域の住民がボランティアとして参加し、今の「鶴彬を顕彰する会」にもつながり、地元で顕彰活動が続いている。ただ私も地元高松で鶴彬の顕彰活動してきた一人として感じることは、地元の人たちは、地元の人が発信しても鶴彬を評価してくれないのだが、全国的な著名人が鶴彬を評価すると、評価してくれるということだ。今回、全国的に著名な佐高さんが集英社新書という著名な出版社から本を出してくれたことは心強い。

地元で、鶴彬はどう見られているか。岩手県の元校長の宇部功さんが数年間、高松の小学校で鶴彬の授業をしてくださっていたので、若い世代の人の方がむしろ鶴彬に親しみを感じてくれているとは思うが、澤地さんが指摘されたように、一部の地元の人、特に年配の人の中には鶴彬のことを「獄中死したアカ」という見方をしている人もいるかもしれない。ただ、私自身に関していえば、そういうことを言われた経験はない。

地元の人が鶴彬を顕彰できない理由は、もう一つ、私は歴史認識の問題にあると思う。私の知り合いで高松在住の年配女性から聞いた話である。その夫が「国のために戦争に行き、戦死した兄を顕彰しないで、戦争から逃げた鶴彬を顕彰するのは、おかしいじゃないか」と言ったという。「逃げた」というのは史実ではないが、「なるほど、そういうふうに見る人もいるのか」と思った。

日本が敗戦したことで、多くの日本人は洗脳が解け、自分たちは「今まで騙されていた」と感じたという。この本に紹介された澤地さんや城山さんもそうだろう。私が鶴彬の会で知り合った元少年航空兵で特攻を志願したという星野啓次郎さんも、日本が敗戦したことで騙されていたことに気づいたと私に語っていた。その経験が、戦後、内灘闘争や鶴彬を顕彰する活動の原動力となっていた。そして、星野さんの盟友の一人でもあった岡田一杜さんも、その一人かもしれない。岡田一杜さんは、一九九二年生まれ。一九四九年、小池蛇太郎（鶴彬の友人）が「鶴彬のこと」という小文で戦後初めて鶴彬を紹介した『人民川柳』に参加。以来、先駆けて鶴彬の資料集めや、鶴彬の知人たちからの証言集めに奔走。この本に詳しく紹介されている一叩人さんとも交流があり、一叩人さんに資料の提供も行ったり、最初の鶴彬句碑を金沢に建立したり、創設した「和」川柳社などを通して長きにわたり、石川県を中心に鶴彬を顕彰してきた。そうした岡田一杜さんは、実は被爆者でもあった。このことは、彼は生前語らず、彼の遺品の長崎の被爆者手帳から分かったことであ

る。彼の甥の話によれば、原爆投下直後、広島の救護に入り、続けて三日後に長崎の救護に入ったということであった。岡田一杜さんもまた、国に騙されたという思いが、鶴彬の顕彰活動の原動力だったのではないかと思う。

「あの戦争は間違っていた。二度と繰り返さない」という覚悟を持った幣原喜重郎首相を中心とする政治家と、敗戦で打ちひしがれ平和を渇望していた国民の総意のもとで、平和主義を掲げる新憲法が生まれ、それが現在まで支持されてきた。一方で、「あの戦争は間違っておらず、戦後、連合国総司令部（ＧＨＱ）が新憲法を日本人に押し付けてきた。その屈辱的な憲法を改正し、軍拡し、日本の栄光を取り戻そう」という歴史認識から、憲法を改正し、再軍備を進めようとする政治家や評論家もいることも事実である。

また、戦争遺族の中には、家族の戦死が、「騙された結果の無駄死にだった」と簡単には受け入れられない方々もいる。あの戦争は聖戦であり、戦死は栄誉であり、戦死者は英霊となり、靖国神社にまつられているのだと。私は戦争遺族でないので、同じ立場には立てない。しかし、仮に私の子どもが強制的に戦争にとられ、石ころとなって戻ってきたことを想像したとき、悲しみと、戦争を始めた人間に対しての怒りしか湧いてこない。おそらく誰もがそうだろう。そうした国民の怒り悲しみを、喜びに変える装置として靖国神社は機能し、権力者にとっては都合のよい施設という見方もできるが、それでも靖国の神々を拝みたい人々もおり、この靖国神社の賛否をめぐっては、根の深い論争があることは否めない。歴史認識の問題が、感情論ぬきで議論できるようになるまでには、もう少し時間がかかるのかもしれないが、私たちは戦争を繰り返さないために、何ができるかということを、理性的に考えていくべきである。

佐高さんや澤地さんが、「天皇制という臍」を除いた形で、鶴を顕彰してはならないだろうとも指摘されたことも重い言葉である。戦前、神であった天皇は、戦後、人間となった。しかし、天皇は憲法で定めるところの「日本国民統合の象徴」として、戦後私たちは教育を受けてきた。天皇は私たちとは異なる、何か特別な存在であると思っている。その証拠に、平成から令和に代わるとき、日本中はお祭り騒ぎとなった。新天皇夫妻を、日の丸の小旗を振って出迎える人々の映像が、私には戦前の日本人に重なって見えた。

しかし、今後、女性天皇などをめぐり保守とリベラルが論争となり、国民分断の象徴になるかもしれない。政治利用する政治家が現れるかもしれない。戦後の天皇は人柄が温厚で国民の痛みに共感し、国民から親しみを持たれてきたが、今後、その国民の期待に応えられない天皇が現れるかもしれない。人口減少社会を、今まで以上の外国人出身者が支えることになるかもしれない。そのとき外国人出身者たちと、移民を排斥したい保守、あるいは天皇を崇拝させたい保守の人たちとの間で、社会は混乱するかもしれない。だが、これからますます多様性のある日本になっていくことを考えると、人間が象徴を努めるには、いずれ限界が来るのかもしれない。鶴彬は、私たち現代人の先を見据えた人物だったのかもしれない。

鶴彬は、あの暗い時代の象徴であり、鶴彬の詠んだ句は、見事、あの時代を撃ち抜いている。近い将来、鶴彬の獄死が、広島の原爆ドームと並ぶ「戦争の象徴」となり、私たち国民が鶴彬の句や人生を通して歴史を深く学び、日本の未来につなげていくことを、地元高松の住民の一人として期待したい。

最後に、これを読んだ方の中には、私が子どもたちにトラウマを与えるために旅行に行ったのかという印象を持たれた方もいるかもしれない。ご心配なく。宮島で野生の鹿とふれあい、水族館でスナメリやアシカショーを見、アナゴ丼を堪能し、ロープウェーで弥山に登り、瀬戸内海を眺望。帰りは夕日が映える厳島神社の鳥居を眺めながら焼き牡蠣やもみじ饅頭を食べてきた。子どもたちは大喜びで、資料館に行かないのであれば、また広島に行きたいと言っている。この子どもたちが、鶴彬の平和の意思をこれからも受け継いでくれるものと信じている。

読書リレー（第七回）

武田裕一

1 『反戦川柳人 鶴彬の獄死』

（佐高信 集英社新書）

佐高さんは、鶴彬を後世に遺そうとした人、師父井上剣花坊を中心に鶴が出会った人、さらに、古関裕而、司馬遼太郎と城山三郎、石川啄木等と比べることによって、鶴の批判精神、節をまげない生き方を明らかにしている。

戦後約八十年、再び戦争の空気が漂い始めたこの時代に、鶴の反骨精神を評論家として生きる自分の矜持としたい気持ちが伝わってくる。澤地久枝、城山三郎について書いてある本文を引用する。以下、（ ）は私の補足です。

（P41・42）

澤地が「有限会社　久枝」まで作って、『**鶴彬全集**』の復刻に注力したのは、鶴が天皇制否定を貫いたからでもあった。

「万歳とあげて行った手を（大陸において来た）」の前段には「天皇陛下」が隠れている。「テンノーヘイカ　バンザイ」なのである。

自らも皇国少女だった澤地は生涯それを悔い、否定して殺された鶴を、どうしても後世に伝えなければならないと思った。

（P58・59）

17歳で〝志願〟して海軍に入った城山は、皇軍、すなわち天皇の軍隊というものがどんなものかをしたたかに思い知らされ、国家に裏切られたという痛みを終生消せなかった。また、自分は〝志願〟したと思ったが、あれは志願ではなかった。言論の自由のない天皇制ファシズム下の当時の社会が〝強制〟したのだと悟って、その傷を抱えたまま戦後を生きたのである。

そんな城山が、信じてしまった少年の自分に復讐するように、あるいは精神の火傷を負った自らの青春を切開するように書いたのが、この『大義の末』である。城山にとって、これは書かずにはいられない作品だった。文字通り、城山文学の原点であり、最重要の小説である。

（P60）

作中（『大義の末』）で柿見（主人公、城山の分身）は天皇制を次のように断定する。

「天皇というのものは、支配権力にとって実に便利な存在だからな。国民の総意を代表し、それを越えた存在ということにしておけば、たとえ自分たちが不都合なことをしても、天皇の意志だと責任を逃れられる。国民の批判を無視することができる。世論にすり代り、世論をおさえつける権威―天皇元首説がまた出てくる筈だ。しかも、憲法改正ということで再軍備と結びついて。…国防などと言ったって、結局そのときの政治権力を守るだけ。国民は狩り出され殺される。そんなとき、一番適当な冠が天皇制だ。天皇という一語ですべてが正当化される」

（P61・62）

城山と違って強制的に天皇制国家の大日本帝国の軍隊に放り込まれた鶴は、もっとストレートに天皇制へ呪詛を肥大化させただろう。

そんな鶴のことを澤地が知ったのは、昭和という時代に関わりのある資料を集めている中でだった。二〇〇九年十二月号の『俳句界』で私（佐高）と対談した時、澤地は、一叩人（命尾小太郎、『**反戦川柳人鶴彬の記録**』を書く）と鶴について書いたのは一九九〇年代だったと思う、と語っている。

当時はまだ、故郷で鶴は知る人ぞ知る存在で「獄中死したアカ」という見られ方だった。「それが今では町をあげて、郷土の誇るべき作家として扱われているのですから、すごいことよね」

と澤地は続けているが、それでも、「天皇制という臍」を除いた形で、鶴を顕彰してはならないだろう。それは鶴自身が望まないに違いない。天皇制（批判）にこだわり続けた城山をここで取り上げた理由である。

（P53）

私（佐高）より十八歳上の城山について私は『城山三郎の昭和』を書いた。それが角川文庫に入る時、澤地に解説を頼んだ。

そこに澤地はこう書いている。

昭和の幕開きに城山さんが生まれ、敗戦の年の一月、佐高さんは生れる。

昭和には、「戦争の暦」の日々があり、一九四五年八月十五日のポツダム宣言（降伏勧告最後通牒）と受諾・敗戦により、二つの時代となった。とはいえ、天皇制という臍の緒につながった一つの昭和でもある。

2 『方丈記私記』

（堀田　善衛　ちくま文庫）

この本で堀田は、敗戦後も「天皇制という臍の緒につながれた昭和」を考えた。

（P53）

（一九四五年）三月十日の（東京）大空襲を期とし、また機ともして、方丈記を読みかえしてみて、私はそれが心に深く突き刺さって来ることをいたく感じた。

（P59～61）

（一九四五年三月十八日）九時すぎかと思われる頃に、おどろいたことに自動車、ほとんどが外車である乗用車の列が永代橋の方向からあらわれ、なかに小豆色の自動車がまじっていた。それは焼け跡とは、まったく、なんとも言えずなじまない光景であって、現実とはとても信じ難いものであった。…

小豆色の、ぴかぴかと、上天気な朝日の光りを浴びて光る車のなかから、軍服に磨きたてられた長靴をはいた天皇が下りて来た。大きな勲章までつけていた。…

私は瞬間に、身体が凍るような思いをした。

…

これらの（集まってきた）人々は本当に土下座をして、涙を流しながら、陛下、私たちの努力が足りませんでしたので、むざむざと焼いてしまいました、まことに申訳ない次第でございます、生命をささげまして、といったことを、口々に小声で呟いていたのだ。

私は本当におどろいてしまった。私はピカピカ光る小豆色の自動車と、ピカピカ光る長靴とをちらちらと眺めながら、こういうことになってしまった責任を、いったいどうしてとるものなのだろう、と考えていたのである。こいつらのぜーんぶを海のなかへ放り込む方法はないものか、と考えていた。ところが責任は、原因を作った方にはなくて、結果を、つまりは焼かれてしまい、身内の多くを殺されてしまった者の方にあることになる！そんな法外なことがどこにある！こういう奇怪な逆転がどうしていったい起り得るのか！

（P63・64）

…その臣民としての優情もまた、まことにおどろくべきものであり、それを否定したりすることもまた許されないであろうという、そういう考えもまた、私自身において実在していたのである。

もしそうだとしたら、そういう無限にやさしい、その優情というものは、いったいどこから出て来たものであるか。その優情は、情として認められるものであるとしても、政治として果してそれをどう考えるべきものか。あるいは逆に、政治は人民のそういうやさしさに乗っかることは許されてしかるべきことかどうか？政治は現実に、眼前の事実として、のうのうとこの人民の優情に乗っかっていたではないか。政治がもしそれに乗ることが出来ない、許さるべくもないものであるとしたら、たとえ如何なる理由づけがなされても、のこのこと視察に出て来るなどということは、現実に不可能なことでなければならないであろう。

（P65・66）

…新たなる日本が果たして期待出来るものかどうか…。

しかも、人々のこの優しさが体制の基礎となっているとしたら、政治においての結果責任もへったくれもないのであって、それは政治であって同時に政治ではないということになるであろう。

（P53）

政治は何かを利用しなければ、それ自体では立たぬものであろう。従って政治はあらゆるものを利用する。無常観などその最有力な武器となりうるものである。

ある川柳作家の生涯

秋山 清

《５ 最終回》

それを截断するものは、俳句が文学芸術の方に傾斜しつづけ、川柳は文学であることを、そのはげしさとその俗っぽさをひっくるめて、生活に身をすりよせたところからわれわれに忘れさせる、この二つの行きちがう性格にある。この二つのものには歴史の歩みの中でそれぞれに獲得した伝統が秘められているはずだ。非芸術の文学、であることこそ川柳の誇りであり、侵されることのない特徴、性格の強靭さという気がしてくる。晩年の鶴の反戦的川柳は、そこに盛られている事実の力づよさの他に、非芸術の性格にまで現実が抽象化された激烈さによって、読むものを掴む力をもっていた。

彼が自分の生命ととりかえたいくつかの反戦的作品をたずねてみよう。（これらのものは、大型の爆撃機もレーダーも、もちろん原水爆もなかった時代の戦争を対象として書かれたものである。）

勲章をくれて大砲の的とする
手と足をもいだ丸太にしてかえし
万歳とあげていった手を大陸において来た
タマ除けを産めよ殖やせよ勲章やろう

出征の門標があってがらんどうの小店

このうち二つ目の「手と足…」の句が、大阪の川柳誌がやった告発に用いられたというが、彼を知る人が必ず記憶しているほどの句である。次の「万歳と」の句とともに、他の文学ジャンルにもこれだけのいらだちをもった、単刀直入な反戦作品はみあたらない。あるいは川柳だからこれだけの作品が書けたのだ、という見方もなり立つとすれば、鶴が自負したように、俳句との統一という疑心暗鬼は全く消失するだろう。昭和十二年の作品とすれば、小説、短歌、詩などにも、もう反戦的な作品はほとんどかげをひそめたばかりか、すでに、戦意昂揚のための自分らの芸術の売り込みがさかんになってきた時期でもあった。

昭和十二年の秋には「柳壇もしだいに戦時色をふかめた。各柳誌は時局協力の傾向をあらわにしたが、中に単なる追従協力にあきたらぬ積極的ファシストが現れた。古川柳研究に特異な足跡をのこした大阪の森鶴牛子らの『三味線草』は、近頃、『蒼空』誌上のふとどきな作品傾向として鶴の『手と足を』、堤水叫坊の『射抜かれて笑って死ぬるまで馴し』、相沢学人『華かに名を売りて故郷へ骨が着き』などを挙げ、かかる皇軍に背く、非国民を処断せよ、と検事局に迫った」（『和』第九号）という事態を見たのである。

川柳という特殊なジャンルのなかの、このはげしい対立は、伝統川柳と新興の、その中でも階級的立場に立とうとするものとの相容れなかった抗争のどぎつさを物語る。このとき鶴彬が、彼をおとしいれた人々が牙城と考えている古川柳をどう受けとっていたかを一べつしておきたい。

「新興川柳が発生したことは既成川柳の通俗的精神に対する反逆に根ざしているのであるから、古川柳などはけなしつけ、こきおろす以上に、問題としてとりあげることがなかったのである。しかし現在の僕たちにとっては、こうした誇りは恥辱にまで転化していると云える。」

「かつて通俗の名において放てきした古川柳を今一度学び直す必要を通感せずにはいられない。」「この通俗性こそ川柳が執拗なまでに現実の詩であったことのあらわれであり、またこれは生産力のひくい幼稚な段階に照応した現実の認識の限界であったことを理解する――」

「売った日を命日よりもさびしがり。傾城にするとて親は生みつけず。いびられに行くが女の盛りなり――。このようなせっぱつまった感動をうけとることができるのは、生きた現実を生きた矛盾の姿によってあらわすという川柳文学独自の諷刺精神と表現方法による。」（**「古川柳から何を学ぶべきか」の要約**）

伝統川柳をよしとするものたちもまた、あ

の戦争の時期には、国家総力戦という現実に対処したはずである。しかし、古川柳がよって立った町人的、反武士階級的レジスタンスはまったく喪失して、ひたすら権力に身をすりよせる媚態であった。古川柳は公方さまさえ作句の対象となし得る独立性をもっていたが、戦争下の通俗川柳は、支配者への追従と反抗者への加撃を本分とした。まったく古川柳の精神からの離脱のみであった。

古典にたいするこのような新旧の意見の対立と現実的抗争は、他の芸術にも、文学のジャンル間にも、戦争期を通じて顕著にあらわれた。伝統の遺産を発展成長の糧としようとするものと、伝統の権威の袖にひたすらかくれ縋るものとの相違、要は現実にたいする生き方の裂け目から発生する対立である。

鶴彬には「坂井久良岐」という戯詩がある。その部分を引用してみよう。

彼は現代の中に空気を吸い
飯をたべて生きている
しかし彼は
いつもたえずみずからを
過去の歴史の中へ生かそうと
ひたすらにつとめている
彼はやせおとろえた
駄馬にまたがっている
駄馬の名は「古川柳」
めざすところは
封建のむかし　花の「お江戸」
川柳は江戸の
武士と町人の協同社会のシンボル
いざ川柳をもって
ブルジョアとプロレタリアの格闘に
ふみ荒らされた現代を
花のお江戸の平和にかえさん！
つづけ！　ものどもよ　　（略）

古川柳を再評価して現代川柳のための糧としなければならぬという一方に、古川柳をのみ川柳とみる通俗的伝統主義にたいする彼の理解と攻撃の姿勢は、この戯詩からほぼ読みとることができる。

しかし戦後十五年たって、現代川柳は依然として伝統川柳によって量的に圧倒されているごとくである。たとえば労組の機関紙誌の川柳選者のほとんどが、かつて戦意昂揚の標語川柳生産者によつて占められている実情がこれを説明しつくしている。

百年もの年月をおいて読むとき、痛烈だった古川柳の諷刺もむしろほほえましい揶揄に転化する。生活の様相が変化しているからである。そのほほえましさを現実に求むれば、下層民が下層民をわらういささかのウィットに終始し、手なれた十七字定形がいちばん親しい詩形となるであろう。歯にひっかかるもの、こなれのわるいものとしてではなく、気やすく読んで読みすてられるものとしての現代川柳である。

いま川柳壇は、質の問題としてではなく量の問題として古きものと新しいものとの対立が、前者に圧倒的な力を発揮させているかにもみえる。『川柳人』、『蒼空』、『川柳と自由』、などによった昭和十年以前のヒューマニズム川柳は、戦後の今日の自由時代に入って、かえってその後継を十分に育てていない。戦後の文化のひろがりと浸透がアンバランスな状態の埒内での現象としてこれを考えることもできるだろう。しかし、「墓標かと見れば国会議事堂です――石原青竜刀」のような作品は、通俗化した、現状維持の伝統川柳派から生まれて来ない。痛烈な自由の欲求と反現実追随からのみ芽生えるものでなければならない。

私の念頭に多少のかかわりのあった鶴彬のことが往来するのは、戦争期におけるこの文学の上の大きな犠牲がその後彼の後継者だちから如何に評価され、如何にうけつがれているか、の問題としてであり、彼をたおした勢力が、今日如何なる理由で文学のツラをして生きているのか、の現状をしりたいためであった。

彼の仕事のほんとの研究はこれからであり、私は烏三平、岡田一吐、青木英夫らのおかげで、わずかな回想をここに綴りえた。近頃の喜びである。

（了・一九六〇年）

担当・渡辺 寛（周 立東爺）

■かつて何年にもわたって岩手県盛岡市からこの石川県かほく市高松の地にご足労いただき、高松小学校や大海小学校で高学年を対象に鶴彬の川柳について授業をしてくださった宇部功先生から、顕彰会事務局に次のお手紙をいただきました。

平野喜之様

やっと冬将軍が去り、雪もさびしそうに日影にひっそりと残る盛岡です。梅の花が咲き、ふきのとうが見える頃になりました。

３・11はあれからあっという間に12年、はやいものです。

原発回帰の動きがありますが、まだ原発事故の終りは見えません。ロシアの戦争、国内のさまざまな問題。令和の世も平和には、まだ遠い時代。今年も学校で鶴彬を通して平和を語りつづけたいと思っています。

顕彰する会も九月に向けてゆっくりと動き出していることでしょう。

佐高氏の出版もたのしみですね。多くの人々に鶴彬を広めてほしいですね。

「こどものこころ五・七・五」年間賞、同封します。ご活用ください。（宇部功）

その年間賞を掲載させていただきます。

令和四年度

こどものこころ五・七・五 年間賞

令和五年三月十日

宇部　功　選

モンスターになったつもりで吐いた息
一本木中　三年　山崎　碧斗

仁愛の土壌に芽吹く種ひとつ
北陵中　二年　山下　美音

はちのすをつつきまくってにげまわる
玉山小　四年　宮崎　翔天

ありたちが人間をみてにげていく
城北小　二年　かがや　あい子

おじいちゃん命をかけて米つくる
三年　土田　彩乃

てんでんこ命を守る合い言葉
四年　折居　沙織

お母さん電話の時は声きれい
四年　ささき　かなで

電池がきれるまでなにをしようかな
五年　上杉　薫子

まわり道したから今のぼくがいる
六年　折居　潤希

さむいけど冬だけの空きれいだな
六年　土田　雪乃

人間は地球のいのちうばってる
涌津小　六年　加美山ひろおみ

弓をひく父のせなかをおっている
晴山小　三年　大志田　柊羽

ミサイルのＪアラートが鳴りひびく
六年　本田　好

逃げ道を見つけて曲がり行き止まり
六年　本田　るり

風物詩色とりどりに光る街
河北小　六年　佐藤　瑠果

何もない私が歩き道できる
六年　幕内　あかり

寝てる間に親とサンタの贈り物
六年　小田　恭之郎

くらげがねふわふわひかるすいぞくかん
角浜小　一年　久保田　葉月

たいようは大きな道を歩いてる
一本木小　一年　山崎　則鳳

岩手山田んぼにうつり別世界
田頭小　六年　工藤　望夢

いちばんのたのしいきせつさむい冬
山根小　四年　田澤　歩夢

でこぼこだ友達関係山のよう
北松園小　五年　石村　柑奈

水仕事手あれがひどくなってくる
米内小　五年　高橋　宙己

難民がカイロ一つに涙する
篠木小　六年　堰合　市佳

やたいのねひかりがぼくをよんでいる
山形小　二年　じょうないりゅうま

けんかして心がさむい昼休み
五年　岩脇　悠真

―鶴彬・交流の広場―

■四月十二日（水）午後

七尾市在住の飯田昌史さんが、鶴彬資料室と浄専寺に来訪されました。飯田さんは元教員で、現在は彫刻家をされている方で、その彫刻の師匠は香川県に住んでおられる大西康彦さんという方だということでした。その大西さんと同じく香川県に住んでおられる書家の樋笠幸三さんが、昨年（二〇二二年）十一月十九日～二十七日、香川県丸亀市のギャラリー多閑坊で「鶴彬に挑み、ウクライナを哭く彫刻と書のコラボレーション　大西康彦（彫刻）・樋笠幸三（書）展」を開催されたそうで、その写真集を見せてくださり、そしてプレゼントしてくださいました。

飯田昌史さん
（浄専寺境内の鶴彬の墓碑と句碑の前にて）

鶴彬を顕彰する会の事務局で話し合い、もし可能なら高松歴史街道フェスティバルに大西さんの彫刻や樋笠さんの墨書を展示していただいたらどうかということになり、大西さんにご連絡差し上げたところ快くお引き受けいただきました。そして、大西さんが樋笠さんに連絡していただき、樋笠さんにも作品展示をご快諾いただくことができました。

■四月十四日（金）

金沢から細川久佐子さんと吉原妙子さんが資料室を来訪されました。

■五月五日（金）

富山県高岡市から室正人さんが来訪されました。

室正人さん
（浄専寺境内の鶴彬の墓碑と句碑の前にて）

■五月十一日（木）

水口裕子さんと小林憲明さんが、資料室を訪問されました。

小林憲明さんは、一九七四年生まれ、新潟県出身の方で、５歳の時にレンブラントの絵画に憧れ絵の道に入られたそうです。現在、愛知県渥美半島で二児の父親をしながら絵を描かれています。金沢教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の讃迎事業として金沢真宗会館ホールで「ダキシメルオモイ」展をしていただいたのですが、展示会が終わった翌日、水口さんの案内で、鶴彬資料室を訪問されました。

浄専寺にも来られて話が盛り上がり、「鶴彬の絵も描いてみたいなあ」と言ってくださったので、ちょっと期待しています。

小林憲明さん
（浄専寺境内の鶴彬の墓碑と句碑の前にて）

第11回 鶴彬のふるさと「高松歴史街道フェスティバル」

会場／高松産業文化センター大ホール

1 9月1日（金）午後2時～5時
9月2日（土）午前10時～午後5時
●第10回記念「**鶴彬**」**かほく市民川柳祭**
●第28回 **鶴彬川柳大賞**
・入賞・入選作品はフェスティバル会場で鶴彬の句の行灯と共にパネル展示。
・かほく市民川柳祭の表彰式は9月2日（土）午後2時より大ホールで行われる。
・鶴彬川柳大賞については投句者全員に、後日入賞、入選作品の発表誌を送付する。
◆**鶴彬彫刻と墨書・作品展**も大ホールで。

2 9月3日（日）
・**佐高信さん講演会** 午後1時30～3時
演題「**時代を撃つ川柳人 鶴彬**」
・**座 談 会** 午後3時10分～4時

3 9月14日（水）
●第6回「**墓碑法要の集い**」
・開会・午前10時～閉式10時30分
・会場／浄専寺
●第25回鶴彬をたたえる集い「**碑前祭**」
・開会・11時～閉会11時30分
・会場／高松歴史公園

■編集後記

鶴彬を顕彰する会事務局　平野喜之

まず会員の皆様には「はばたき」43号の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

さて今年は鶴彬没後85年、かほく市民川柳祭は第10回目ということで、大きな節目の年になります。コロナの影響で規模を縮小せざるを得なかった高松歴史街道フェスティバルですが、節目の年にふさわしい行事ができないか事務局一同思案に暮れていたところ、二つのご縁を賜りました。

一つ目のご縁は著名な評論家・佐高信氏が新書『**反戦川柳人 鶴彬の獄死**』を三月に出版されたことです。出版社である集英社を通して佐高氏にお手紙を届けていただき、9月3日に高松産業文化センターで講演をしていただくことになりました。

二つ目のご縁は七尾市在住の**飯田昌史**氏が高松の鶴彬資料室や浄専寺を訪ねて下さったことです。その飯田氏の彫刻の師匠である**大西康彦**氏と電話で連絡を取り合い、大西氏と書家の**樋笠幸三**氏のお二人に、今回のフェスタにご協力いただくことになりました。とても有難いことです。

今年一月、金田平夫会長が胃がんの手術をされ、二月に事務局一同、お見舞いに行きました。四月で金田医院を閉院されるとのことでしたが、お元気そうなご様子でした。会長は続けていただけるそうです。会員や読者の皆さんにご報告申し上げます。

■発行　鶴彬を顕彰する会
■事務局　〒929-1215
石川県かほく市高松ツ66　浄専寺（平野喜之 気付）
■ TEL・FAX　076-281-0546
携帯TEL　090-8209-3679
■ E-mail:yoshiyuki.h.1192@gmail.com
■ホームページ http://tsuruakira.jp/

◆会員募集◆（随時受付）
＊年会費 3000円（団体 3000円）
3000円には「鶴彬通信 はばたき」購読料含む
＊「はばたき」購読のみの場合は 2000円 / 年
郵便振替口座　00740－5－75480
加入者名「鶴彬を顕彰する会」

鶴彬を顕彰する会

「はばたき」ダウンロード

問い合わせ先

鶴彬という人